

書名をめぐって

引き続き、『排蘆小船』について述べる。前稿では新編全集版『近世随想集』所収の「解題」（鈴木淳氏執筆）の把握について異議を提示したのであるが、実は、この把握は、『排蘆小船』の成立時期を宣長の京都遊学中とする鈴木氏の自説を補強するために掲げられたものであることが、『近世随想集』の巻末に付された「解説」を読むと分かる。そこで鈴木氏は「本書の執筆時期」という小見出しのもとに書かれた行文中で「本書を一成書として見たときに、様々な未熟さや杜撰さが目立つことも否定できないが、この事実に対しては、少し大目に見過ぎてきたきらいがありはしないだろうか。」(p.485)と『排蘆小船』の若書きゆえの「未熟さや杜撰さ」を強調し、そのうえで「執筆時期の問題」の議論を展開しているからである。

しかし、若書きゆえの「未熟さや杜撰さ」という判断は主観的である。近代以降の出版物の章立てから見れば、『玉勝間』も『初山踏』も、雑多さと不整合を抱え込んでいる。もちろんそれらは若書きではない。私の目から見れば、『玉勝間』より『排蘆小船』の方が歌とは何かという一つの主題をめぐって書かれているだけに、書物としての統一性はより明瞭だと映る。

私の主観によれば、『排蘆小船』というテキストは、書き進みながら思考を創造していくスタイルによって書かれていると映ること前稿で述べた。実際、実証的な事実を書き連ねつつ思考を深めるという方法、もっと言えば、具体的な言葉のなかに人間の思想を読み取ろうとする方法は、江戸の学問の獲得のもっとも良質な部分であり、契沖の『万葉代匠記』も宣長の『古事記伝』もこの方法によって書かれている。かてて加えて従来 of 定見を打破して、自己の新見を打ち出そうとすれば、思考は当然ジグザグの進路を歩む。そのジグザグは、事実突き当たり、それと取り組みながら、勅撰的な観念論を打破しようとする思考のスタイルから生じるもので、実証的な学問にはつきものの性格である。中世の観念論的な歌学の打破に取り組んだ契沖と宣長が実証的な注釈を精密に行ったのはそのためだ。出発点と目的地を最短距離で歩むのが理想のようにわれわれは思いがちだが、目的地はジグザグの歩みの結果としてはじめて見いだされるものに過ぎない。

実際、『古事記伝』も巻4まで書いてから巻頭の「総論」に着手したわけで、『古事記』を読むための方法的な準則はジグザグな進路を歩んだ結果として見いだされたものだ。同じことは、契沖の『万葉代匠記』にも言える。このことは、また別稿に書くことにする。

判断の主観性ということ言えば、中公バックス版『本居宣長』（石川淳責任編集、1984年、中央公論社刊）所収の『排蘆小船』「解題」（萩原延寿担当）の評価は、「それにしても、処女作というのは、どうしてこう、そのひとのすべてを、いや、そのひとのよいところばかりをみせてくれるのだろうか。」(p.68)と、同じ若書き論として全く対照的である。

どちらにしても、究極的には主観の域を出ないと言えそうなるが、仮に『排蘆小船』が若書きゆえの「未熟さや杜撰さ」を内包していたと認めたところで、それが「京都遊学中」の著作であるのか、それとも「松坂帰郷後」の著作であるのかといった微妙な問題の決め手になるとは到底思えない。

『排蘆小船』に関しては、この「執筆時期」の問題が妙に重大視されてきたが、この議論にどれほどの価値があるのか分からない。このテキストが京都で書かれたのか、松坂で書かれたのかが明らかにな

ったところで、テキストの読み方にさほどの変更が生じるとも思われない。

ただ、『排蘆小船』の「執筆時期」については、私は鈴木氏の結論と同様、京都留学中のことだと考えを持っている。ただ、『排蘆小船』が在京中に構想され、着手され、かつ、書き終えられたという想定が私には自然に思われるだけである。

ところで、いったい宣長はなぜ自らの歌論を『排蘆小船』（あしわけをぶね）と名づけたのであろうか？本稿の主題はむしろこちらにあるわけだが、このことについて鈴木氏による「解題」（p.244）は、巻主に数行分書きさした上から貼紙し、「あしわけをぶね」と標題を後補する。これは『万葉集』

巻十一の「湊入りの蘆別小船障り多みわが思ふ君に逢はぬ頃かも」によるもので、本書の内容に

様々な差し障りがあることと、自説の真の理解者になかなか出会えない憾みを寓したもののか。

と述べている。鈴木氏の「本書の内容に様々な差し障りがあることと、自説の真の理解者になかなか出会えない憾みを寓したもののか」という指摘は、『排蘆小船』という書名に込められた意味を問うたものとして重要だと思う。

上の引用歌は『万葉集』巻11・2745の歌で、原文は、

湊入之葦別小船障多見吾念公尔不相頃者鴨

で、訓読文は、原文の文字に即して

湊入りの葦別け小舟小舟障り多み吾が念ふ君にあはぬ頃かも

とするのが自然だろう。

歌意は「湊に入る葦別け小舟のように障害が多いので、わが愛するあの君にお逢いできないこの頃であることよ」で、「葦別け小舟」は、湊に入るために葦という障害を押し分けて進む小舟を意味し、その小舟によって人目に妨げられて思いをなかなか遂げられないわが身の譬喩としているのである。

もし、宣長がこの歌を意識して『排蘆小船』という書名を思い立ったのだとしたら、「湊入りの葦別け小舟」を「本書の内容に様々な差し障りがあること」とし、「吾が念ふ君にあはぬ頃かも」を「自説の真の理解者になかなか出会えない憾みを寓したもののか」という鈴木氏の解釈は説得力を持つと思う。

『万葉集』には巻12・2998歌に

湊入之葦別小船障多今来吾乎不通跡念莫

（湊入りの葦別け小舟障り多み今来む吾をよどむと念ふな）

＝「湊に入るために葦を別けてゆく小舟のようにさしさわることが多くて、今すぐ行こうと思っても行けないわたしを、妻問いをしぶっているなどと思ってくれるな。」

とあり、また、この2998歌の異伝として

湊入尔葦別小船障多君尔不相年曾经来

（湊入りの葦別け小舟障り多み君に逢はずて年そ経にける）

＝「湊に入るために葦を別けてゆく小舟のようにさしさわることが多くて、あのお方にお逢いしないままに年が経ってしまったことです。」

ともある。以上の3首の歌は、すべて作者不明歌である。

ところで、『排蘆小船』を読む限り、宣長がすでに『万葉集』を原文で読んでいたことが分かる（寛永版本であろう）が、歌学のためには、和歌の正典と言える三大集をもっとも重んじるべきだと言っており、その三番目の『拾遺和歌集』に上記の『万葉集』巻11・2745の小異歌が、

みなといりの蘆わけ小舟さはりおほみ我が思ふ人に逢はぬ頃かな

という形で「人麿」の作として載せられている。

また、宣長が私淑した頓阿の『草庵集』にも「あしわけをぶね」の用例が7つほど見られる（注）。

宣長が三大集を尊重し、頓阿に親しんだことを考えに入れたうえで考えるなら、書名をつけるに当たって意識した万葉歌は最初にあげた巻11・2745歌の方であったと推測するのが自然だろう。

この点で、新編全集の鈴木氏の判断は支持される。

ところで、『万葉集』の原文では「あしわけをぶね」は3例とも「葦別小船」と書かれている。しかし、書物の題名は『排蘆小船』と書かれている。なぜ宣長は『万葉集』の原文の「葦別」ではなく、「排蘆」という文字表現を選んだのであろうか。宣長が『万葉集』を漢字の原文で読んでいたことは、

文字のこと、万葉集におきては、いかにも正義を正し、吟味すべし。これいかんとなれば、万葉は真名に書き置きたるを、後に点詞を付けたれば、撰者の意にたがふことあるべし。随分文字につきて詮議し、訓点の誤りなきやうにみるべし。万葉に書きたればとて、見馴れぬ文字を、今書くべからず。（新編全集『近世随筆集』、p263）

とあることから明かである。しかも、宣長は、ここで漢字の原文に即して「詮議」することが「撰者の意」にかなうことだと述べている。にもかかわらず、書名において「あしわけ」を「排蘆」と書いたのはいかなる理由によるものなのであろうか。

そもそも「あしわけをぶね」という語は、湊の葦（難波津が有名）を押し分けて進む小舟のことである。しかし、「別」の字には「押し分けて進む」意はない。『万葉集』が「あしわけ」の「わけ」を「別」と書くのは、「別」の字から「わけ」という「訓」を読み出すのが容易だからであろう。

つまり、「あしわけ」を「葦別」と書く書き方は、訓読はしやすいが、語義はずれているということである。「押し分ける」意の「わく」を書くには「排」の方がふさわしいのである。しかし、和語の順に従って「葦排小船」と書いた場合、果たして「あしわけをぶね」と訓読できるだろうか。

訓読の上では万葉歌の原文のように「葦別小船」と書く方が遥かに分かりやすいだろう。

ところで、若年の宣長にとって、「あしわけをぶね」は、障害を押しわけて進む小舟をはっきり意味するものだった。恐らく、その意識が「押し分ける」意を明確にもった「排」の字を選ばせたのであろう。しかし、「葦排小船」では読みづらい。そこで、漢文風に『排蘆小船』と書いたのではないかと思う。「排蘆」という字面は、蘆を押し分けて進むという意味を明確に表すとともに、漢文風に返読して読まねばならないところから、「排」の字の、訓ではなく、意味を読み取らせやすいからである。

宣長は若年の頃には日記を漢文で書いており、後年のように「漢意」の排除を強く意識してはいなかった。『排蘆小船』という漢文風の語法を含んだ書名もさして違和感なくつけられたものとしてよかろう。

いずれにしても、契沖に拠りながら中世以来の堂上和歌の流れを強烈に批判し、自説を書き進めて深化させていく過程で、宣長は、「あしわけをぶね」の「わけ」の語感をもっともよく表す文字として「排」と選んだと言えよう。同時に、『万葉集』の歌を引き歌の如く連想させつつ、その語句を断章取義的に利用して、「自説の真の理解者になかなか出会えない憾み」を寓喩したのだろう。

とすれば、『排蘆小船』という書名は、孤独を引き受けることを承知で自己の思想を確立し、表明しようとする宣長の述志の表現になっているわけである。

(注)「あしわけをぶね」の用例が頓阿の『草庵集』にあること、田中紀峰のウェブサイト「亦不知其所終」の記事「排蘆小船」(2012年1月6日付、<http://tanaka0903.net/?p=9450>)に指摘されている。

2020年3月26日 研究代表者 西澤 一光